

特集 世界文化遺産

黒島の集落

Villages on Kuroshima Island

6月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」。集落ごとの多様な潜伏のあり方はまさに日本独自の信仰形態であり、貴重な構成資産はその歴史を物語っています。今回の特集では、その250年を超える信仰の歴史や「黒島の集落」との関わり、黒島体験ガイドなどについてお知らせします。

現代に残る日本独自の信仰のかたち

I 禁教の歴史の始まり 弾圧、島原・天草一揆、鎖国

大航海時代を背景として16世紀半ばに来日した宣教師は、貿易による利益獲得を目指していた長崎と天草地方の領主をまず改宗させました。そして「キリシタン大名」と呼ばれた彼らを介し、その領民を集団で改宗させることにより領内にキリスト教を広めていきました。長崎と天草地方はこのようにして日本における宣教の拠点となり、改宗した民衆の間には「組」と呼ばれる信仰の共同体が生まれ、それぞれの集落で指導者を中心に信仰が維持、実践されました。

16世紀末、豊臣秀吉は日本統一に向けた動きの中でキリスト教を禁じました。17世紀に入り、江戸幕府は当初、キリスト教を黙認したものの、1614年に全国的な禁教令の下に宣教師を国外へと追放し、教会堂を破壊しました。キリシタン大名など、かつてキリスト教を積極的に取り入れた支配階級はいち早く棄教して仏教へと改宗し、ひそかに潜入する宣教師や彼らをかかまった信徒には過酷な拷問が加えられ処刑されました。さらに、一般民衆へのキリシタン探索も次第に強化されるようになりました。

II 日本の伝統的宗教に見える 独自の信仰形態を育む

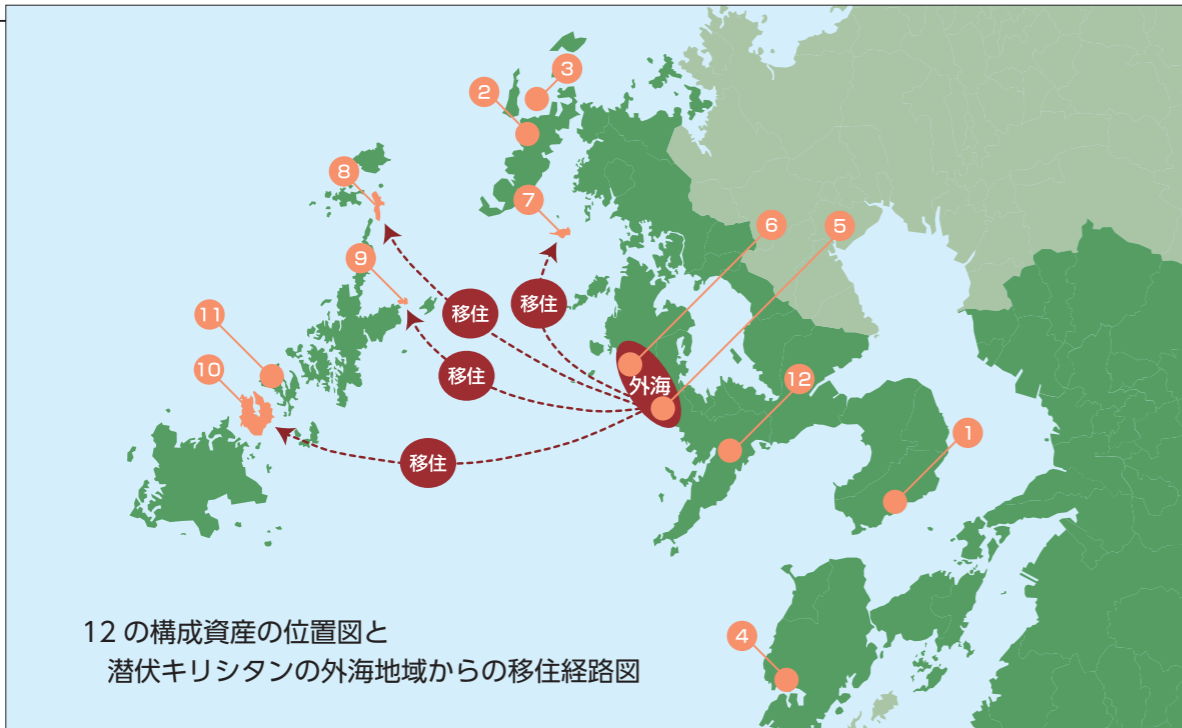
日本各地には、宣教師との接触が絶たれた後も、厳しい探索をかくぐり、社会的には普通に生活しながら「潜伏」して信仰を続けることを選択した「潜伏キリシタン」が存在しました。しかし、17世紀後半に各地で「崩れ」と呼ばれる大規模な潜伏キリシタンの摘発事件が相次いで発生し、その結果、一部の例外を除き、潜伏キリシタンは途絶えま

けることができた背景には、取り締まりを行う幕府の側に、本人が信仰を表明しない限り密告も処罰もしないなど「黙認」の姿勢も存在しました。潜伏キリシタンによる「秘匿」と社会的な「黙認」との絶妙な均衡の下に、日本の伝統的宗教や一般社会と関わりながら自分たちの信仰を続ける潜伏キリシタンの伝統が育まれたのです。

III 移住による伝統の維持、拡大

18世紀の終わりになると、大村藩に属する西彼半島西岸の外海地域で人口が増加したため、五島藩と大村藩との協定の下に「開拓移住」が行われました。開拓移住者の中には多くの潜伏キリシタンが含まれていたことから、新たに離島の各地に潜伏キリシタンの集落が形成されました。

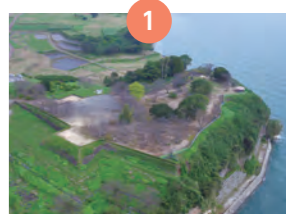
潜伏キリシタンは、自分たちの共同体を維持するために移住することを決め、日本の伝統的宗教や一般社会との折り合いをつけることを考慮して移住先を選択しました。例えば平戸藩の牧場の跡地利用のため再開発の必要があった黒島や神道の聖地である野崎島へと入ったほか、病人の療養地として使われていた頭ヶ島、五島藩の政策に沿って未開発地であった久賀島を移住地として選びました。



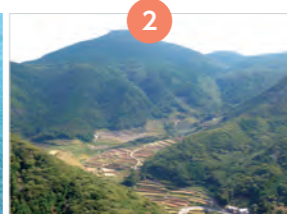
12の構成資産の位置図と 潜伏キリシタンの外海地域からの移住経路図

した。その例外となった地域が、かつての宣教拠点であり、他の地域に比べて長期にわたる宣教師の指導の下に組織的な信仰の基盤が整っていた長崎と天草地方でした。これにより、この地方にだけ潜伏キリシタンの伝統の証しとなる資産が残されました。長崎と天草地方の潜伏キリシタンは、自分たちの信仰を続けるために、それぞれの集落内で16世紀以来の共同体を維持し、宣教師に代わって洗礼を授ける「水方」、教会暦をつかさどる「帳方」など、役職を担当する指導者を中心にキリシタンの信仰にかかわる儀礼、行事などを行いました。さらに自分たちの信仰を实践するため、「平戸の聖地と集落」のようにキリスト教が伝わる以前から山岳仏教信仰の対象であった山やキリシタンの処刑の行われた島を拜んだり、「天草の崎津集落」のように生活、生業に根差した身近なものを信心具として代用したり、「外海の出津集落」のようにマリア像などの聖画像に対してひそかに祈りをささげたり、「外海の大野集落」のように古来の神社にひそかに自分たちの信仰対象を重ねたりするなど、一見すると日本の伝統的宗教のように見える独自の信仰形態を育みました。さらに、250年もの長期間にわたって、キリシタンが「潜伏」し、信仰を続

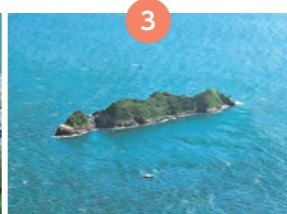
歴史が始まった場所



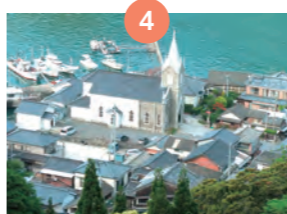
1 原城跡 「島原・天草一揆」の主戦場の主戦場



2 平戸の聖地と集落 (春日集落と安満岳) 「山」が信仰の対象



3 平戸の聖地と集落 (中江ノ島) 「島」が信仰の対象



4 天草の崎津集落 「アワビ貝など身の回りのもの」が信仰の対象



5 外海の出津集落 「マリア像などの聖画像」が信仰の対象



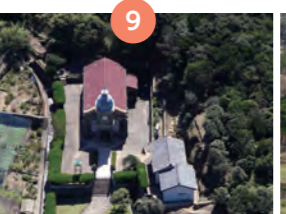
6 外海の大野集落 「神社」が信仰の対象



7 黒島の集落 「平戸藩の牧場跡地」で集落を形成



8 野崎島の集落跡 「神道の聖地」で集落を形成



9 頭ヶ島の集落 「病人の療養地」で集落を形成



10 久賀島の集落 「島の未開拓地」で集落を形成

どのような場所を選んで信仰を続けたのかを示す集落

何を拜んでいたのかを示す集落

12の構成資産

写真1~10 長崎県提供

IV 「信徒発見」を転機とした伝統の変容と終焉

1854年、アメリカ力をはじめとする西欧諸国からの相次ぐ開国の要求を受けて、江戸幕府は下田と函館を開港しました。その後、長崎が開港したのは1859年で、長崎へと入った宣教師は居留地に住む西洋人のために「大浦天主堂」を建てました。建設直後の1865年、ひそかに信仰を続けてきた潜伏キリシタンの一人が大浦天主堂の神父に自分たちの信仰を告白しました。「信徒発見」と呼ばれるこの衝撃的な出来事により、長崎と天草地方の潜伏キリシタンは転機を迎えることになりました。

その後、各地の潜伏キリシタン集落の指導者は、ひそかに宣教師との接触を図りました。しかし、それぞれの集落では宣教師の指導下に入るのか、これまでの信仰を続けるのかの判断を迫られ、時には対立事件にまで発展することもありました。1868年当時、キリスト教はまだ解禁されていなかったため、潜伏キリシタンであることを表明した集落には、再び厳しい弾圧が加えられました。

1873年、ついにキリスト教が解禁されると、潜伏キリシタンのうち宣教師の指導下に入ることを決めた者は、

16世紀に伝わったキリスト教であるカトリックへと復帰し、かつての指導者の屋敷などを「仮の聖堂」として新たな信仰活動を開始しました。その一方、「かくれキリシタン」のように宣教師の指導下に入ることを拒んだ者は、引き続き自分たちの信仰形態にとどまりました。また、在来の神道、仏教へと改宗する者もいました。

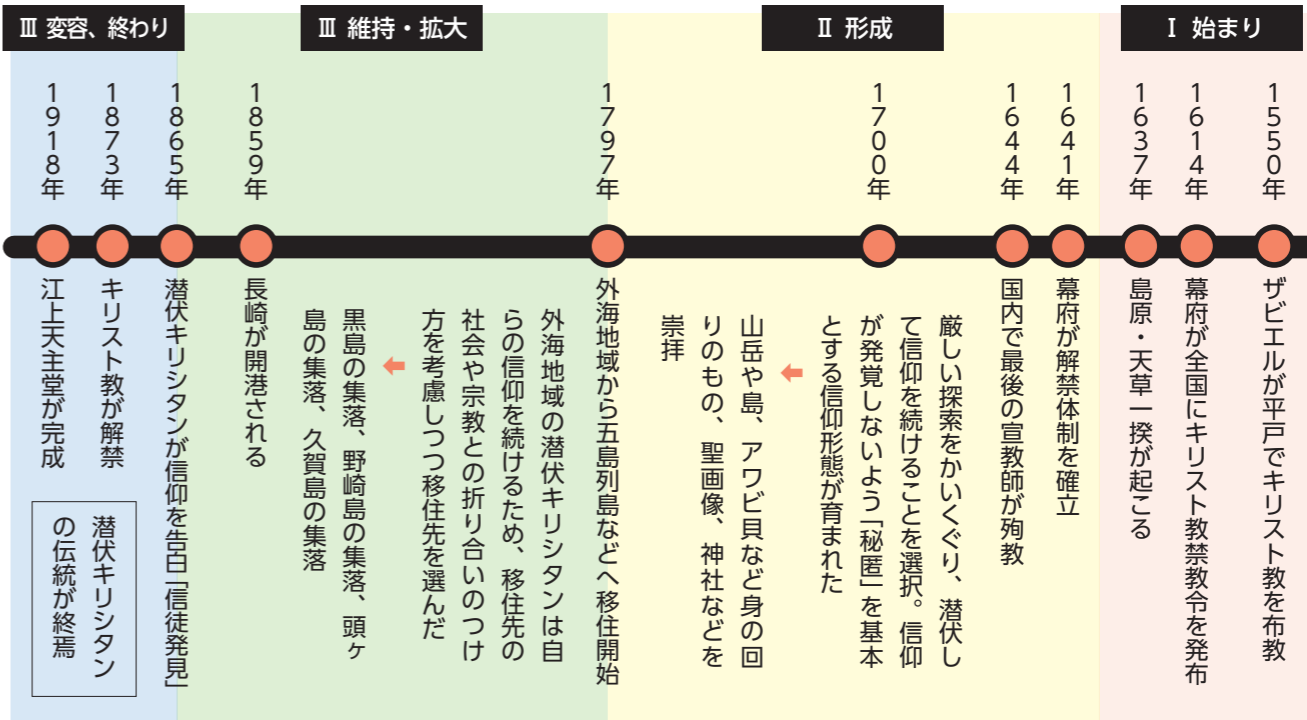
解禁から10年が経過したころから、集落内の「仮の聖堂」などを祈りの場としていたかつての潜伏キリシタンは、新たに素朴な教会堂を建て始めました。これらの教会堂は、カトリックの信仰活動が復活したことを表すだけでなく、2世紀半にも及ぶ禁教の下で、長崎と天草地方の各地における「潜伏」が終わりを迎えたことを象徴的に示す存在でもありました。「奈留島の江上集落」の江上天主堂は、外地域から移住した潜伏キリシタンがカトリックへと復帰し、江上集落の地勢に適応して建てた木造教会堂です。この教会堂は地域の風土に基づく在来の技術のあり方を示すとともに、潜伏キリシタンの「潜伏」が終わりを迎えたことを示す教会堂の代表例となっています。



11 伝統の終焉を示す教会堂の代表例
奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)



12 伝統が変容する大きな契機となる「信徒発見」が起こった場所
大浦天主堂
写真①② 長崎県提供



長崎と天草地方のキリスト教の歴史

「黒島にも600人の潜伏キリシタンがいます」

牧場の廃止に伴う開拓民の誘致

本市の西方海上に浮かぶ周囲約12kmの小島「黒島」。黒島の名称は古く13世紀頃の文献史料に初めて登場します。15世紀頃から北方の平戸島の勢力下に入り、島の北部に本村集落が形成されました。16世紀後半に黒島で宣教師が活動した記録は存在しないことから、この時期にキリスト教が伝わることはなかったものと考えられています。

17世紀になると、黒島には平戸藩の牧場が設置されましたが、馬よりも田畑の必要性が増したことから、19世紀初頭に廃止されました。その後、牧場跡の再開発を計画した平戸藩は開拓民の誘致政策を進めたため、それに応じて外地域などから黒島へと移住した開拓民が、19世紀中頃にかけて新たに7つの集落を島内に形成しました。これらの開拓民の中には外地域などを出身地とする多くの潜伏キリシタンが含まれており、新しく形成された7つの集落のうち6つ(日数・根谷・名切・田代・麻・東堂平)は潜伏キリシタン集落でした。

潜伏キリシタンは、牧場跡の再開発のため開拓民の誘致がなされていたことで先住民と共存できる可能性が高いと思われる黒島を選ぶことにより、共同体を維持しようとしたものと考えられています。

弾圧と潜伏

黒島に移住した潜伏キリシタンたちは、19世紀初頭に造営された本村集落の興禅寺に所属し、表向きは仏教徒として振る舞いました。

黒島では、毎年、本村集落の本村役所(黒島を管轄する平戸藩の出先の役所とされていた庄屋屋敷)において潜伏キリシタンの取り締まりが行われ、潜伏キリシタンはキリストまたは聖母マリアの像を踏むこと(絵踏)を余儀なくされました。

興禅寺の本堂には、観音菩薩立像を聖母マリア像に見立てた「マリア観音」の像をひそかに安置し、寺院に参拝することを装いつつ、実際にはマリア像に祈りをささげていました。

黒島の潜伏キリシタンが表向きは仏教徒を装いつつ、指導者を中心として組織的に自らの信仰を継続したことは、一見すると仏教徒のもののように見えますが、実は墓石の向きや埋葬の方法が仏式とは全く異なる独特の墓地が形成されたことにも表れています。



黒島の集落

大浦天主堂の宣教師との接触

1865年の世界宗教史上の奇跡といわれる「信徒発見」の知らせは程なく黒島にも届きました。信徒たちはそれを確かめるため、ひそかに長崎に渡りました。そして大浦天主堂の宣教師に会い、自らの信仰を告白し、黒島にも600人の潜伏キリシタンがいることを告げました。

信徒発見から約2カ月後のことで、禁教令がまだ解けていない中で命懸けの告白であったとされています。

その後、改めて宣教師から教理の指導を受け、1872年に黒島の潜伏キリシタンは全てカトリックへと復帰しました。復帰の当初は、かつての指導者の家など島内の2カ所が「仮の聖堂」とされました。そのうちの1カ所は日数集落で代々「水方」を務めた出口家の屋敷でした。やがて新たな教会堂の建造に対する機運が強まり、1879年に各集落から利便性の良い島の中央部に初代の黒島教会堂が建造されました。その後、信徒の増加に伴い、教会堂の建て替えが計画

「信徒発見」から2カ月後の命懸けの告白

され、海岸沿いから建築資材を運ぶなど信徒全員の労働奉仕と費用負担の下に、1902年に新築された教会堂が現在の黒島天主堂です。黒島天主堂では、今なお当時の絵踏を贖罪する祈りが毎週さげられ、禁教期の記憶が確実に伝えられています(上写真)。

黒島の全域が世界文化遺産

黒島には19世紀前半に移住した潜伏キリシタンに起源を持つ6つの集落が分布し、指導者の屋敷跡、墓地、生業に関わる土地利用形態が大きく変わることなく残されています。また、19世紀後半の新たな信仰の局面を迎えた後に建てられた「仮の聖堂」の跡をはじめ、初代の教会堂跡も良好に遺存しています。潜伏キリシタンに対して非干渉の姿勢を取り続けた仏教集落内に位置し、潜伏キリシタンがひそかにマリア観音像を安置して祈りをささげた仏教寺院や絵踏が行われた代官所跡も良好な保存状態にあります。

それらは黒島の牧場跡地へと移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を色濃く表しています。これらの遺跡とともに、禁教期の潜伏キリシタンと仏教徒との関係を示す8つの集落を含む黒島の全域が世界文化遺産の構成資産となっています。



黒島の歴史を感じる
重要ポイントガイド

1 本村集落 / 庄屋屋敷跡 / 興禅寺

本村集落①は14世紀頃から続く黒島で最も古い仏教集落です。島の仏教徒は後から来た潜伏キリシタンと共存しつつ過度に干渉しないようにしていました。②の公園は「経路」が行われていた「庄屋屋敷跡」です。この先の興禅寺にはマリア像に見立てた子抱観音(マリア観音)③があったといわれており、潜伏キリシタンも仏教徒を装って信仰していました。

2 蕨集落

黒島南部の蕨・田代一帯には平戸藩の牧場がありました。1802年に廃止され、跡地への開拓移住が奨励されました。これらの地域には外海地域などから多くの潜伏キリシタンが移住し、海岸近くの斜面地に家を立て、ひそかに信仰を続けました。蕨集落では、海岸から防風林、住居、畑と一列に並ぶ当時の土地利用の様子が今も残されています。

3 潜伏キリシタンの墓地 (仕切牧墓地)

仕切牧墓地は、蕨集落の潜伏キリシタン墓地で、1880年代にカトリック共同墓地ができるまで使われていました。黒島の仏教墓は墓石の正面を西に向けて建ててありますが、この墓地には東に向けて建てられた墓もあります。東向き墓の中には近代に建てられた墓がないことから、潜伏キリシタンの墓と考えられています。

4 潜伏キリシタンの指導者屋敷跡 (仮の聖堂跡)

この場所は黒島の潜伏キリシタンで指導者を務めた出口家の屋敷跡です。解禁前年の1872年にひそかに神父を招き、ここで初のミサが行われました。キリスト教解禁後は「仮の聖堂」となり、1879年に島の中心に最初の教会堂が建てられるまで使われていました。黒島の聖地の一つとして石碑(信仰復活の地)が建てられ、顕彰されています。

5 初代黒島教会堂跡

1879年、黒島で最初の教会堂がペルー神父の設計により建てられました。建設場所は信徒の集まりやすさを考慮し、島の中心部が選ばれました。現在の教会堂(黒島天主堂)は同じ場所に建てられた二代目ですが、脇祭壇には初代の主祭壇が、楽廊下の手すりには初代の聖体拝領台が転用されるなど、初代教会堂の名残をのこっています。

1 重要ポイント 集落 仏教集落 集落 潜伏キリシタン集落

黒島ウェルカムハウス 黒島港 本村 1 東堂平 古里 日数 4 根谷 名切 5 田代 蕨 2 仕切牧墓地 ※敷地内は立ち入り禁止。 初代黒島教会堂跡 興禅寺のマリア観音 (現存しません) 牧場跡の蕨集落



寄進者として潜伏キリシタンの名前が刻まれており、寺との密接な関係がうかがえます

黒島体験ガイド

1 ガイドと行く島歩き
黒島の名所を島のガイドさんと一緒にウォーキングで巡ります。
● 1日コース⇨黒島港⇨黒島神社⇨かつば塚⇨興禅寺⇨蕨展望所⇨黒島天主堂⇨カトリック共同墓地⇨黒島港(昼食等の休憩を含み約3時間30分)
● 半日コース⇨黒島港⇨黒島神社⇨黒島天主堂⇨黒島港(約1時間20分)
料金 参加人数により異なりますのでお尋ねください
定員 1人から参加できます



2 ふくれ饅頭作り体験
黒島に昔から伝わるふくれ饅頭を島のおばあちゃんなどと一緒に作ります。
所要時間 約3時間
料金 2千円/人
定員 5~20人



3 黒島豆腐作り体験
黒島独特の製法で、にがりの代わりに黒島周辺の海水を使用して作ります。
所要時間 約4時間
料金 3千円/人
定員 2~10人

※①②③とも希望日の7日前までに、電話か黒島観光協会HPのお問い合わせフォームで黒島観光協会に申し込んでください。集合・解散は黒島ウェルカムハウスとなります。

※詳しい内容は黒島観光協会HPをご覧ください。島めしや宿泊など他の観光の組み合わせについても黒島観光協会へお気軽にお問い合わせください。

黒島観光協会 ☎56・2311



©「黒島の集落」などの歴史に関する問い合わせ
文化財課 ☎24・1111